



1



\* 0056301000 \*

0056301-000

特 246-760

軍部の中堅将校を覗く

黒田隆二・著

有恒社

昭和 11

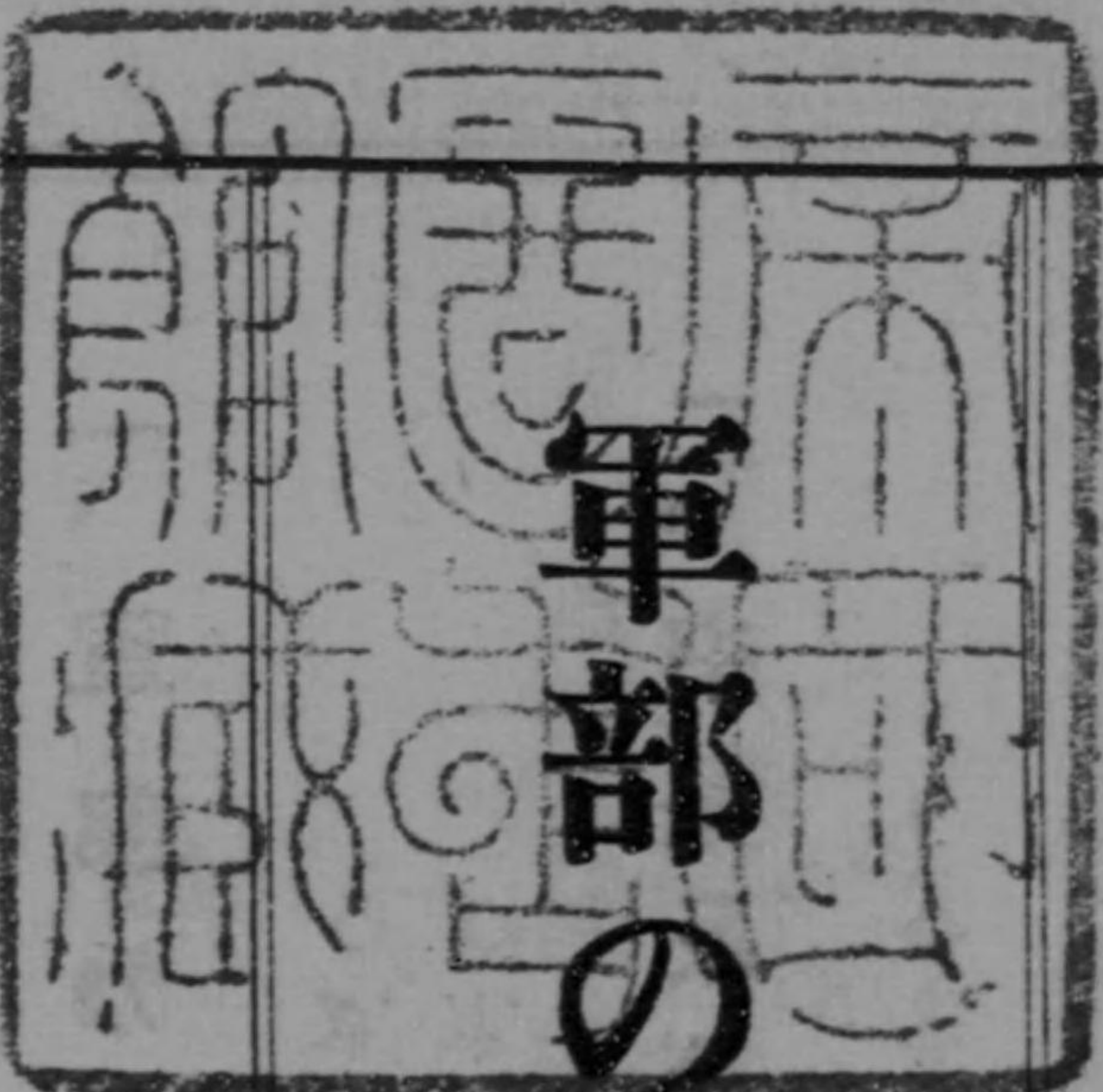
AJC

この著作物は、著作権者不明のため、第67条の規定に基づき、平成12年  
けで文化庁長官の裁定を受け使用する



特246  
760

黒田隆二著



軍部の  
中堅將校を覗く

東京有恒社發行





目次

一、軍部の底に潜むもの

- ◇軍部の國家的役割
- ◇軍部の言分

二、中堅及び少壯將校の立場

- ◇軍部内に占める位置と役割

三、イデオロギ―

- ◇革新的性質の強い理由

四、派・閥・グループの如何

- ◇明治・大正時代の派的グループと現在グループの性質

- ◇外部からの影響
- ◇陸軍と海軍

五、軍部の中樞に居る中堅及び少壯將校

- ◇陸軍省
- ◇教育總監部
- ◇參謀本部
- ◇其他部

六、むすび



## 軍部の中堅將校を覗く

### 一、軍部の底に潜むもの

昔から女ならではの夜の明けぬ國と言はれた日本も、今日では「軍部ならではの夜の明けぬ國」になつてしまつた。

最近では、何かあるごとに軍部の名前が出て来る。唯名前が出て来るだけならまだしも、五・一五事件だの、二・二六事件だの様に、時たまは鐵砲の弾をぶつばなさうと言うのだから、事が穩でない。

これらの事件は、軍部の一部の連中だけだつたからまだよかつたが、軍部の連中が皆そんなことをする様になつたらたまつたものではない、然しあの事件が、一應當事者が處罰されたからと言つて軍部が以前よりは従順になつて居ると想つたら恐ろしい見當違ひである。

即ち二・二六事件以來、軍部はより一層現在の政治に關心を昂めて來たし、それと同時に、も



つと政治を統一的計画的に軍部の欲する様に行なつて行こうとして居りそれらの意圖は段と熾烈なものになつて行きつゝあるかのようだ。

その事は特に例を引く迄もないが、現在、我が國の重要政策の其の大部分が軍部の提唱になる處のものであるのを見ても充分領けると思ふ。

電力國營問題、行政機構改革、議會制度改革等、最近物議をかもし様な問題は全部、軍部の強硬な主張に依るものであり、そしてそれは亦、大概、軍部の主張する通りになつて行くのだから軍部の力や亦偉大なものかなである。

勿論、こうした風に軍部が今日、我が國の政治の上に一番の立役となつて登場し、軍部の思ふ通りの政治を是が非でもやらなければならなくなつて來たのには、それ相當の深い根據があるのである。

即ち、現在の國家體制が持つてゐる矛盾が益々大きくなり、その爲に、世界の情勢は全く豫想外に切迫し、何が些細の事があれば、直ぐに戦争になる様な紙一重の間にある。而かも、各國とも世界情勢はそんな危機にあるのだから幾分でも自重するのが當然なのに、自分が二進も三進も

行かなくなると、世界情勢がどうのこうのとは言つて居れんので、——伊太利がエチオピアを征服して自分の領土とした様な——早速、どこか弱い部分を見つけてそれを自國の權益下に置き、自國內のどうにもならない行詰りを、其處でなんとか解決しようとし、うの目、たかの目でねらひつこをして居ると言つた有様である。

且ては「世界平和の確立の爲に」とか何んとか言つて、絶大の権力を持つて居た國際聯盟も、こうした世界各國のやむにやまれぬ欲求が齎らしてゐる世界の危機の前には全く無力になつてしままい、此の前のイタリーのエチオピア侵略の時の如く、あつてもなくても好いものになつてしまつた。世界は今日では全く、理屈もヘチマもない強いもの勝ちと言う無秩序状態に入つて來てしまつた譯だ。

だから世界各國とも、もし戦争になつたら他の國に負けてはならんとかばかり、何はさておいても、出来るだけの軍備を擴充しようとする狂人の様になつて居るのである。

世界の情勢がこんな状態にある時、日本だけが、各國のそうした軍備充實振りをばかんとして手をくはへて見て居る筈はない。



即ち、世界各國にも増して、軍備の充實を期せん事には、アブなくつて仕方がない、明治維新以來、日清、日露と、多大の犠牲を拂つて今日迄築き上げて來た日本の地位は根底からくつがへされてしまふのである。

其處で、現在の日本がそうした世界情勢にさらされて居る場合、その事を直接感じ又その負擔成つて來る處は何處かといふと、それはとりもなほさず、いざ戦争といふ場合、眞先矢面に立つ軍部が、一番その事を感じるのである。

だから今日軍部が、國防の絶體安全を躍起となつて騒ぐのは無理はない。

然し、如何に國防の絶對安全ばかり騒いでも、單に騒ぐばかりではどうにもならない。

即ち、國防の絶對安全を期する爲には、それ相當の、手段が必要であることは言はずと知れた事である、即ち國家的に國防の手段を講じなければならぬ譯だ。

處が、政黨にしる、政府にしる、資本家にしる、軍部が絶叫する、國防の絶體安全性の確保に就いては大いに賛成もし、自分達も非常時を痛感するとは言へ、自分から先に立つて、軍部を援けいざ戦争となつた場合、軍部をして何の憂もなくどしどし思ふ存分戦争をさせる様なことには

爪の垢程もやろうとはしないのである。

即ち、資本家は資本家で、成る可く安い生産費でたんまり儲けることばかり考へ政府が軍事豫算を増額する爲の財政上國民負擔を均等にすると言つて、事業會社や資本家に増税すると言へば早速増資を行なつたりなにかして増税防衛の煙幕を引つぱり、おまけに軍事豫算が増額されて軍需品生産が増すと言ふと、それにつけこんでたんまり儲けると言ふ情けない有様である。政黨は政黨で、政權目當に懸引ばかりして居て、國民の事も、國防の事もそちのけにして居、内閣は内閣で八方美人になる事ばかり考へてゐるから何も出來んと言つた状態で、國防充實の「コ」の字も實際にやらないのである。

其處で、前にも述べた様に、國防の責任を最も直接に感じる軍部は、單に國防充實の急務を騒ぐだけでは、——その間だけでも刻一刻危機に近づく世界の情勢に居たゞまれなくなり、無能の政府や、政黨なぞ問題にせず、卒先して、國防の充實の爲に、乗り出さざるを得なくなつて來た即ち、今日の世界情勢から言へば、先づ何を放つて置いても、國防の絶對安全を期することが寸刻を争ふ位絶對必要なので、政治も經濟も、文化も、それから社會も、總て、國防充實の爲に



最も適當な方法を、誰が何んと言つて非難しようと、とるより他に仕方がなくなつて來たのである。

こうした軍部の態度が、今日表面へ表はれて、電力國營論になつたり、増税になつたり更に、そうした國防充實上必要な政策を軍部の欲求する通りにやるには現在の政治機構では不統一、非組織的だと言ふので、「行政機構を改革する」とか、「議會制度を改革する」と言ふ問題に迄發展して來て居るのである。

而して、こうした軍部の國防觀念より出發する、政治經濟への積極性は、特に今回、軍部が電力國營や、「政治機構の改革」を主張し出したからと言つて、昨日や今日、急激に昇まつて來たものではなく、世界の情勢が急迫を告げ出すと同時に、昂まり來たつたものであるから、仲々根強い根據を持つて居り、以前より軍部から、國防の事を盛に警告され乍ら、何もしなかつた政黨や、政府として見れば、今日軍部に、國內の政治を牛耳られても、一言も非難することは出來ない譯である。

大體軍部の國防力充實の欲求から生じた、政治經濟への關心が目立つて昂まつて來たのは、滿洲事變前後からで、國防力充實の爲めの、國家の政治、經濟についての軍部の意見は——其の手法の問題に就いては今日では發展をしてゐるが——終始變らないものであつて、今後とも、國防問題を基調とする限り、軍部が抱く、政治、經濟等の問題の革新的意圖は決して突飛な變化を來たさないばかりか益々強固なものになつて行く事は勿論である。

以上大體、軍部が今日重要な役割を背負つて登場し來つた處の理由であるが、では、其の軍部は實際に於いてどんな氣持を持つて居るかを紹介して、愈、本問題に入つて行こう。

軍部は言ふ。

「熟々現下の國際情勢を大觀するに、一面に於いて現状維持國と現状打破國との對立あり、他面所謂人民戰線を標榜する自由主義乃至社會主義國家と國家主義を高揚しつゝある全體主義國家との相剋あり、此の勢圍氣の中に在つて、各國は夫々自國の利害關係に従つて、或ひは經濟的に、或ひは思想的に、互に相排擠し互に相連衝し、其究極する處、何時戰禍の突發を見るやも圖られぬ情勢にある」——陸軍パンフレット（陸軍軍備充實と其の精神——二頁）  
従つて、



『今や……國際的摩擦の白熱化する處、方に一觸即發の危機を包藏しつゝある』(同上二頁)  
それであるから

『我が國民は今にして緊張味を失ひ、非常時意識を解消し……たならば……我が大陸發展は中途にして挫折し、東亞平和の確立は愚か……我が國民の生存迄もが重大なる危険に曝されるに至るであらら』——陸軍パンフレット(轉換期の國際情勢と我が日本——一五頁)  
と今日の國際情勢を痛嘆して居る。而してそれにも關らず

『國民の一部のみが經濟上の利益、特に不勞所得を享有し、國民の大部分が塗炭の苦しみを嘗め、延いては、階級的對立を生ずるが如き……』陸軍パンフレット(非常時と國防——一四九頁)

と言ふ憂慮す可き國內の状態であるから宜敷く

『國民が等しく利己的個人主義的經濟觀念より脱却し、道義に基く全體的經濟に覺醒し、速に皇國の理想實現に適合する如き、經濟機構の樹立に邁進し……』(同上——一五〇頁)

『日本精神を基調とし、近代國防の要諦に合致せる全體主義的國家の體制を整備し、國力の全

理的運營を發揚……』陸軍パンフレット(軍備充實と庶政一新——八七頁)

しなければならぬと主張するのである。

『小乗よりも大乘に従ひ、個人主義を棄て、全體主義を取り、個人を犠牲にして、大義の國家意思に従ひ……』

『しかして國家を強からしめ、皇道國家の建設に國民は擧げて協力……』(國防の本義と其の強化の提唱——)

するならば、單に世界各國の軍備競争に耐へ得るのみならず、今日世界各國の脅威と成つて居る。

『ソ聯との軍備競争に堪へ得ぬ様な處は絶對にない。更に右と併行して、廣義國防の見地よりして、速かに國力を最大限度に發揚し得べき體制を完成すべき必要がある……』陸軍パンフレット(陸軍軍備充實と其の精神——四三頁)

と言ふのである。而して

『國防力は國家の實力そのものと言ふ可きであり』(帝國及び列國の陸軍——四頁)



「國防は武力戦のみを対象とするものではなく、平戦兩時を通じ、國家の全智全能を擧げて行ふ國際生存競争に對する保障……」陸軍パンフレット（非常時に對する我が國民の覺悟——二七頁）であるから、國防なるものわ

「其の範圍が政治、經濟、教育、思想、完教、藝術等精神的並に物質的兩方面に於けるあらゆる國民生活の各部門に迄擴大」陸軍パンフレット（非常時に對する國民の覺悟——二七頁）されるべきであると言ひ、其の國防の最大の基礎をなす「國民生活の安定」の爲には各種の、パンフレットを綜合して其の言分を聞くと

「農村漁村の農産物價、生産品配給制度、農業經營、小作問題、電化、工業化、公租公課、負債、肥料、金融、災害、思想及び人口過剩等に關する考査、産業と貿易との調整、輸出組合を始め、各組合の統制、統合による運用の強化、中小工業者の更生、失業救済、やゝ強力な社會政策の實現國民大衆の貧困救助、低利政策、大衆課税の反對、カルテル、トラスト等個人主義的營利主義一點張りによる高物價馴致情勢反對、電力國營、獨占資本の被害是正、重要産業の統制個人主義的或ひは自由主義的經營の排撃、階級闘争の反對、資源開發産業振興、貿易促進そ

して經濟統制」と主張してゐる。

これ等の軍部の主張が果して妥當であるかどうかは、此の項で扱ふ可き問題でないから止めるがこれらの言い分は前述せる如き——軍部が今日、我が國の政治局面に新しい意義と役割を持つて登場してゐる——軍部の底に潜む根強いものと成つて居ることは言を俟たない。

## 二、軍部と中堅將校の立場

扱て以上で軍部が今日、何にかにつけて口を出す理由と、其の根據に就いてあらまし述べたが一口に言ふと、軍部今日の我が國政治及び經濟に對して抱く種々の革新的な考へは、軍部全體がそうした考へを持つて居るとは言へ、其の中でも、特に軍部の青年將校、中堅將校にそれが多いのである。

其の事は過ぐる五・一五事件の時とか今度の二・二六事件當事の軍部關係の人物を見れば——そのどれもが、軍部青年將校及び中堅將校——所謂少壯派——によつて決行され、指導された事に依つて充分領ける。



即ち、五・一五事件や、二・二六事件は今更説明をする迄もなく、前述した様な、我が國の國防問題——廣義國防觀念より出發して現在の我が國の種々の缺陷や矛盾を除かんとする革新思想が、極めて積極性を帯び、直接行動に出た結果であると思ふことが出来る。

従つて、軍部が今日、其の合法的な政治的方法に依つて廣義國防國家を確立し様とする考へと、五・一五、二・二六事件を引き起した軍部一部の少壯派の持つ思想と其の根本に於ては全然同一なものを持つて居るのである。

而して、五・一五、二・二六事件を惹起した主なものが總て、軍部少壯派に屬するものであつた點を考へれば、前述の軍部思想を積極的に具體化せんとする者は、軍部中堅内至少壯將校に多いと言ふことが譯る。

即ち、軍部今日の革新的思想は、以上の様な點のみを以つて考へて見ても、將校間に極めて熾烈であると言ふことが觀取されるのである。

五・一五、二・二六事件以後、軍部は、例の肅軍工作を行つた結果、滿州事變前後の様に、取分け少壯將校間に、そうした革新思想が強いと言ふことは今日では目立たなくなつたと言ふもの

ある。少壯將校其の者の立場から言つて今日と雖も軍部の誰よりも強い革新思想を以つて居るのである。

唯、それが目立たないと言ふことは、少壯派の持つ革新的思想が今日では合法的に政治的方法により具體化されつゝあるので、それが極めて當然なものとされて居るからである。

即ち、少壯派だけが特に革新的思想の持主であると言ふ譯ではなく、今日では軍部全體がそうした革新的思想に燃えて居るので特にこれと云つて目立たなくなつて居るのである。

然し乍ら、その事は少壯派の持つ革新的思想が軍部一般の思想に解消されてしまつたと云ふ譯では決してない。

即ち、少壯派の軍部に占める役割及び地位から云つて、如何に峻嚴なる肅軍の鉞を振はうと、少壯派はどうしても其の革新思想の中心と成らざるを得ない立場にある。

何故かと云ふと、少壯派は其の名前の示す如く、少壯將校である。——即ち、佐官級、尉官級等中堅及び青年將校は其年齢から云つて今日の時代の息吹を最もよく呼吸して來て居る。それと同時に、佐官級乃至は尉官級は、直接軍務に携るから現在軍を取り捲く一切の事情を身を以て經



驗する機会が多く、それだけに、自分の周圍からの影響を最も敏感に感じるのである。

だから今日軍部の主張する問題が常に軍部少壯將校に依り提起されるのは當然の事であり、亦種々の主張に就て、少壯將校の方が熾烈なものも、少壯將校は軍全體の地位から見て、常にあらゆる任務の直接遂行者であるから、其の云ふ事がすべて具體的なものから出發して居るからである。其の點で、今日少壯將校は軍部全體から見て行動的部分になるものであり、軍の中樞をなすものである。

猶以上の點を解りよくする爲茲に一つの例を引いて見よう。――

例へば今日の場合、國際情勢が非常に切迫して居り、其の爲に最大限の軍備を必要として居ることを少壯將校の其の全部が痛感し最大の軍備をなそうとして居る。

而し乍ら、今日の我が國の國力から云つて其の事は種々な障害によつてなかなか満足には出来ない。其處で、軍備擴充の必要さを最も直接に感ずる少壯將校は、其の軍備擴充を不充分になし得ないと云ふ事に對し、それには何等かの缺陷があることを知るに至る。

軍備の充實なるものを飽く迄遂行しなければならんと思へば勢ひ前述の軍備擴充を不満足なら

しめて居る種々の缺陷を直す以外に方法がない譯である。

而して今日の國際情勢から云へば、軍備の最大限の充實を一刻たりと早くしなければならぬ状態にあり、其爲には、どうしても最大限の軍備擴充を不充分ならしめて居る條件を飽く迄も除去すると云ふことになつて來るのである。

従つてそうしたことに最も直接に携つて居る少壯將校は勢ひ自分の立場から、飽く迄も其の缺陷を除去しなければならぬ役割を帯びて來る。

勢ひ、其處で彼等は軍備充實を不充分ならしめてゐる缺陷除去の主張を強くするのである。更に少壯將校は直接の行動者である點に於て常に、軍のあらゆる問題の作製者でもあり提示者である。

それは即ち、前述した様に、常に直接の行動者である關係上、種々の缺陷や、新しい手段を最も早く見つけ出すからである。

斯くの如く見來ると少壯將校は、軍全體を通じ、最も重要な、役割を占め、軍部の動向を決定づける大きなポイントと成つて居ると云ふことが出来る。



### 三、中堅及び青年將校のイデオロギー

扱て、これで幾分少壯將校の立場が判然として來たが、以上述べた様な少壯將校の、軍全體を通じての役割から云つて、少壯將校の持つイデオロギーは、亦軍部全體に流れるイデオロギーの中心をなして居る。

冒頭にも幾分述べたが、少壯將校の今日抱くイデオロギーは、今日では例の二・二六事件以來其の表面化が喰止められたかの感があり、實際にどんなイデオロギーを持つて居るかを知るには困難なことだが、軍部今日のイデオロギーの母胎である點に於て、軍部今日の種々主張を通じて表はれるものであり、それ以外の特種なイデオロギーが存在するものではない。だから……

それが、今日直接行動に移される場合、合法的政治手段に依るか否かの問題に依つて、其のイデオロギーと同一のものであるか、それとも別個なものであるかが特徴づけられるのであるが、少壯將校の抱くイデオロギーが、一つの行動に移される場合、果して非合法手段迄も取らなければならぬ程の性質のものであるかどうかは、二・二六事件を契機とする肅軍工作の進行と共に

覗い知る術もない。

唯、軍部今日のイデオロギーが第一項に於いて幾分述べた如く、極めて我が國の現状に對する改革的性質を帯びて居る處を見れば、その母胎である少壯將校の抱くイデオロギーが、より以上現状に對して革新的なものであることは説明する迄もないことである。

而して、軍部今日のイデオロギーは國外的國內的兩面の情勢からして、國防の完備と國民生活の安定——即ち、廣義の國防國家の確立が中心の題目と成つて居り、少壯派のイデオロギーも亦以上の點に其のポイントを置いて居るのである。

少壯將校のイデオロギーが極めて革新的性質を帯びて居る點は、以上の國防國家の確立の爲の手段が極めて純理論的であり、其の點で或る場合に於いては驚く可き革新的性質を帯びて居るかの如く見ゆるのである。

即ち、廣義國防の見地よりして、國防國家の確立の爲には、政治、經濟、文化等、社會全般に亘つての體制の改革をなさんとする處がそれであり、其の點で、極めて國家社會主義的性質を帯びて居るのである。



而して、それらの實踐的方法の問題に至ると、各人各説のようであり、だからそれを一般づける事は極めて困難である。

従つて、少壯將校の持つイデオロギーは今日に於いては、全く一つの政治的手段を通じてなされるものを持つて其の代表的なものであると云ふ可きである。

或る青年將校が筆者に『國防國家の確立の爲には、現在の社會を改革して、全くの搾取なき社會、即ち、國民の勞力の全部が國民自體の生活と國家に役立つ社會を作らなければ不可能だ』と語つたことがあるが、これなどは其の純理論的なもの、代表的イデオロギーであり、こうしたイデオロギーは勿論少壯將校全體の間に流れるものではないとは云へ其の大部分はやはり、こうしたイデオロギーの抱懷者であると見らるべきではなからうか。

而して、國防國家の確立と云ふことが軍部今日の最大切實の欲求であり、少壯將校の持つイデオロギーも亦それを決定的中心點として居る點で、軍部に依つて提起される問題も、或は少壯將校の抱懷する種々意見も總て以上の國防國家の確立を基礎として居ることは言を要しないのである。

#### 四、派・閥・グループの如何

更に中堅及び少壯將校全部を通じて、イデオロギーに黨派的なものがあるかどうかと云ふ點は今日ではその色別を全く困難にさして居る。

嘗つての明治大正時代の如く、軍部内に於て長州派とか鹿兒島派と云ふような勢力的派閥が隱然存在した時代と今とは、その根本に於て變つて來て居るのである。

即ち、其の時代に於いては、今日程、軍部中堅將校及び少壯將校が、思想的に尖鋭化す可き條件がなかつたから、假に黨派的色彩が強かつたにせよ、それは極めて個人的なものから一つの派的グループを形造つて居たに過ぎなかつた。

處が今日では、中堅及び少壯將校のイデオロギーが極めて尖鋭化し、それが一つの究極的目的を持つたことに依つて以上の如き個人的、派的グループは、全く關心の外になつてしまつたのである。

而して、それであるからと云つて、では、イデオロギーの黨派性に依つて形造られた派的グル



ープが、以前の個人的な關係に依る派的グループに變つて擡頭したかと云へば決してそうではない。

今日、中堅將校乃至は、少壯將校の間に派的グループと目されるゝ如き、種々の會が存在するがそれは決してイデオロギー的な色彩を持つグループではなく、殆んどが相互の親睦と云ふ様な意味のグループである。

勿論、軍人にしてかゝる結社のグループを形造ることは今日堅く禁じられてゐる所以でもあらうが、單にそれのみの理由のみならず、中堅乃至は少壯將校のイデオロギーが總て國防國家の確立と云ふ、政治的目的に於いて一致して居る關係上、そうゝ派的グループ行動を必要としないからである。

かゝる點は、我が國中堅及び青年將校の特徴であつて、之れは一に我が軍部の持つ國家的役割と地位が極めて、明瞭單一なものである關係と更に軍體制が極めて組織的統一的なものである關係に依るものである。

而し乍ら、如何に今日軍部内に其の派的グループが存在しないとは云へ、それだけに外部的な

影響力が可成の根を持つて居ることは否定し難い處である。

其の細々別々に亘つての如何は、覗ひ得べくもないし、亦今日の肅軍の立前から云つて當局の忌諱に觸れるものであるから差控へるが、嘗つて、陸相たりし荒木大將の荒木、眞崎閣などは、其の當時、イデオロギー的な派的グループとして最近の特徴をなすものであつた。

然し今日では、中堅將校及び青年將校のイデオロギーが一つ理論的構成を完成すると同時に、荒本イズムは、其の影を潜むるに至つた。

而して猶それと幾分似た影響力を持つものには、本年八月豫備役に編入され、大日本青年黨を結成した、橋本欣五郎大佐の政治的イデオロギーがある。

即ち、天皇歸一主義を標榜し政治的合法手段に依つて議會進出をなし漸次的に國家改革を行なはんとする彼の主義は、其の目的が、軍部の政治的欲求と同一である點に於て軍部内中堅及び青年將校間に幾分魅惑があるものゝ様である。

その他、橋本欣五郎大佐と同じ様に既に野に下つた軍人政治家の影響力と云へば、滿洲事變當時參謀本部第一部第二部長と迄なつた建川美次中將、海軍出の小林省三郎中將、國體明徴問題に



依つて一躍政線上に飛び出した江口源九郎少將、小林順一郎大佐、在郷軍人の間に深く根を張る明倫會の田中國重大將、皇道會等々力森藏中將、大井成元大將、兩角三郎中將、二子石官太郎中將、渡邊良三中將、於江豊壽少將、松本勇平少將、松井中將、木村恒二中將等々が其の主なるものである。而してこれらの人物は、大概、滿洲事變を轉機とする軍部の政治的關心の増大の波に乗つて出現せる其の當時のダークホース的な人物であつた點で、今日と雖も可成りの影響力を以て居るのである。

猶今日、外部から影響力中、民間出身の革新論者の力も或る程度迄見逃すことは出来ない、即ち。五・一五事件の理論的指導者と目された大川周明博士、それから北一輝等の革新論は、——今日ではそれのみに依つて軍部内中堅青年將校を擱へては居ないが——軍部中堅及び青年將校のイデオロギーが今日の如く判然と理論化されるに至る刺戟的役割を果し來たつたのである。

而して、これら外部からの影響力が、中堅、青年將校間に派的グループを結成せしめる程、色濃いものがあるかと云ふとそうではない、其の殆んどが個人的な共鳴、迎合、私淑程度に終つて居るものが多いのである。それはでは外部からの影響力がそのどれも非常に稀薄だからと云ふと

そうではなく、軍部今日の規律がそれらの黨派的行動を固く禁じて居る所以からである。

それから一般に陸軍と海軍ではイデオロギー的にも、行動的にも可成り違つて居る如く考へられて居るようであるが、それは海軍と陸軍との國防的機能の相違から來る錯覺であつて、決してそうではない。

即ち、海軍は陸軍に比較して陸軍が常に主動的立場に立てる關係からそうした風に見受けられるのであつて今日、軍部イデオロギーの總てが廣義國防と云ふことに終結せられて居る現状から見れば、陸軍であると海軍であるとを問はず渾然一體をなして居り、陸軍、海軍中堅、青年將校の立場も、其の占める位置から云つて——機能上の相違はあるにしろ——殆んど同じであるから特別になにか各々別個なイデオロギーなり、行動手段があるかの如く見るのは認識不足である。

先程も述べた通り、唯陸軍はその性質上、軍事的にも、政治的にも常に主動的である關係上、殆んどの場合、種々の問題の魁をなす立場にあり、其の意味から云つて陸軍中堅、青年將校が亦海軍中堅、青年將校に比較して其の意識の問題等では隱然、海、陸兩中堅青年將校を通じて



の代表的なものであるかの如く見られて居る點は充分ある。

であるから、人によると軍部と云へば陸軍のことを指して居るのだと考へ込んで居るものもあると云ふが如く、稍々もすれば、實際的にも、陸軍の方が海軍よりも問題の先驅者的役割を果して居る場合が尠くない。

殊に政治問題に至れば、其殆どが軍部全體の主張を陸軍が代表して提起すると云ふ風に、其機能の上から云つてどうしても陸軍が軍部の主體と成つて居る様である。其點で軍部中堅、青年將校と言へば直に陸軍中堅、青年將校を聯想するが如く、實際的に今日の中堅及青年將校の問題は先づ陸軍を主體として考へたとしても決して間違ひはないようであるし、亦事實今日軍部中堅、青年將校の革新的思想及び行動は常に陸軍中堅青年將校のそれに依て代表されて居る様である。

## 五、中樞をなす人々

扱て、以上に依つて中堅將校及び青年將校の軍部内に占める位置と役割、それから其のイデオロギー、亦イデオロギーの如何による黨派的な問題等中堅、及び青年將校の大體全面に亘つて――

――甚だ杜撰であり、散漫的ではあるが――述べて見た。

では今日、實際的に言つて、それら中堅將校、及び青年將校は軍部の中樞にどんな位置を占め如何なる任務を果しつゝあるか、其の機關を引つ張り出して幾分見て見よう。

### イ、陸 軍 省

軍部の腦髓が陸軍省であると云ふ風に考へるとすればその腦髓のエッセンスと成るものは軍務局である。

寺内壽一といふ鼻自體からして鼻柱の強い大將が陸軍大臣となつて以來軍務局は、軍部今日の政治的欲求を此の際――出来ることなら全部でも貫徹させるかの様な意氣込みで、軍部の一切の政治的欲求整理作成の中心機關になつて居る。

其處では海千、山千、煮ても焼いても喰へんような磯谷廉介中將が局長として切廻して居るが彼は大體つい最近中將になつた許りで陸軍省内では大幹部に位するとは云へ軍部全體から見ればまだまだ中堅將校と云ふ可き處だ、陸大出で、支那各地に在ること十五ヶ年にも達し支那大使館附武官の際蔣介石に會見し辭職を勸告したと云ふ我無者羅な男だ。



内地では第一師團參謀、參謀本部附、第一師團參謀長、教育總監第二課長、陸軍省補任課長、參謀本部第二部長等々をやつてゐるが彼の、政治的な、乃至は經濟的なイデオロギーは決して正確に理論化されたものではなく、其の中心題目は終始一貫して居ても、其の時々依つて臨機應變にやると云ふ、今日の軍人としては稍々古い方の男だ、もつと自分の持つイデオロギーの一切を究明し盡し、組織づけ、理論づけたなら、今日の軍部を動かす立場にある彼は、もつと手際によい、軍部の要求が思つた通りに生きる様な仕事をやらうと思はれるが、既に年齢から云つても位置から云つても以上の様な努力をなす可き餘地はないから彼はこれ以上——大臣位にはなるかも知れないが——質的に發展する人物ではない。

斯うした人物を局長に頂く軍務局の顔觸れはと見ると成る程軍部の中堅處の精銳をづらりと並べてある。一寸列舉して見よう。

軍事課長が町尻量基大佐(砲)だが、其の下には若松中佐だの園田中佐だの片倉、佐藤、重安等々の各少佐が居り議會制度とか地方制度、行政機構、等の政策的問題から、經濟問題、國際問題等何んでも取扱つて居る、だから茲に居る各將校の頭腦は相當のものばかりだ、意識的に可成

りはつきりして居る人間が多い、重安少佐の如きは曾つてイタリに居たことがあるので、軍部切つてのエチオピア通であるそうだ。

軍務課々長は石本寅三大佐が居り、それに續いて岡本中佐、田村、眞田、吉田善各少佐が居り約二十人位の中堅、青年將校が動いて居る。大體軍務課と云ふのは今年の夏新設されたものであり、軍務一切を司り、陸軍豫算の切盛りを取扱つて居る。

だから陸軍の發展の如何は軍務課の権限にあるのだから、仕事をやつて居る人間も相當に見透しの利く人間ばかり置いてある。

新聞班、班長は秦彦三郎大佐で其の下には三國中佐、松村、大久保、作間、市田、林等の各少佐が居る。茲は言論機關との接觸をし輿論の調査もする。社會團體等との交渉もあり、大體民間に反軍思想なんか起らないようにするのが仕事だ。

茲に居る連中は仕事が仕事だけに仲々物の解つた連中が多い。有名な三國中佐だの松井少佐だのが、居て何千と來る雑誌や書物やら、亦軍事的な意味をもつてゐる映畫に目を通して居る。

更に陸軍省には此の軍務局の他に「人事局」「兵務局」「整備局」「經理局」「兵器局」「醫



務局」「法務局」だの更に本省付き機關として「造兵廠」「兵器本廠」「技術本部」「科學研究所」等々がある。

こうした中樞機關に實際仕事に當つて居るのは皆、所謂中堅ばかりだ。

兵務局は局長が多田禮吉中將で、銃砲課長が大島駿大佐、器材課長が秋山徳三郎大佐、其の下に武田信男中佐以下十四名の少壯將校が居る。

整備局は局長が山脇正隆少將で、動員課長は長谷川基大佐、統制課長木村兵太郎大佐、課員は山本、須藤、山田、西大條、原田等の各中佐、中西少佐以下十四名の少壯將校が實務に當つてゐる。

經理局や、醫務局は其の仕事の性質上、官位も違ふが、人事局は亦軍務局と同じように陸軍省の重要な部門であり、今回の肅軍異動などは皆此處から考へ出された譯である。

局長は後宮淳少將でその下に補任課長加藤守雄大佐、恩賞課長中村明人大佐が居り、田中、中の各中佐以下十五名の課員が居る。陸軍人事の最高機關でどの人間を何處へやらうとお關ひなしの權限をもつて居る。

新設された兵務局は、阿南少將が課長であり兵務、防備、馬政等兵事關係の仕事をして居る。

### ロ、教育總監部

陸軍本省について軍統制の上に重要な機關は陸軍全體の軍教育を司る教育總監部も亦其の殆んど全員を中堅及び青年將校に依つてうすめてゐる。

長官は大將に昇格した許りの杉山元中將が居りその下に中村孝太郎、蓮沼、山室、松井の各中將が居り、杉山大將、中村中將は近衛師團長香月中將、梅津陸軍次官と共に次の陸軍大臣として噂に上る位の人物だ。

庶務課長は富永信政大佐、第一課長本多政材大佐、第二課長上田一郎大佐である。

### ハ、參謀本部

陸軍省、教育總監部の他に我が國國防上の中樞機關として軍部行動の策源地たるものに參謀本部が存在する、茲には畏くも閑院宮殿下を總長に載いて居るが、此の參謀本部内に占める夥しい人員は、軍部中堅、青年將校の最も優秀部分である。

次長西尾中將は滿洲で鳴らした有名な人物であるがその下には總務部長飯田中將、第一部長桑



木中將、第二部長渡少將、第三部長塚田少將、第四部長下村中將が居る。

而してそれに續く中堅、青年將校の顔觸れは素晴らしい位である。

先づ、有名な石原莞爾大佐が居る、彼は滿洲事變當時は關東軍の作戰主任參謀であり、彼の科學的戰術論極めて權威があるものだ、しかも彼は政治に就いても一つのイデオロギーをもつて居る、今回の『新國防充備計畫』は彼のプランに據るものではないかと言はれて居る。

更に『和製ヒットラー』で有名な馬奈木中佐が居る、彼の革新思想など、軍部今日の革新的思潮の最も尖鋭的な部分に屬するものだ。

それに續いてロシア通で、而かも青年將校から慕はれてゐる富永大佐、一見田舎の百姓親爺のような永津大佐、川本、土井、高島少佐等、陸軍各兵科中堅、青年將校の粹が奇り集り、亦海軍各料の精銳逸材を集め、さながら抽出せられた、我が國軍部のエッセンスの一群をなして居る。

軍の動員、統帥、作戰から今日迄人間が作り上げたあらゆる科學を驅使し日本の政治、經濟、社會の悉くの情勢と、世界各國の隅の隅が手に取る如く解る様な仕事をして居るのである。

従つて今日の參謀本部は、我が國政治、經濟、社會、及び世界の動向と極めて有機的關係を持

ち一番敏感であると同時に、又それら諸動向を決定付ける一つのポイントとも成つて居る。

## 二、其の他

更に、以上の他直接軍隊を構成し我國軍の基礎をなす、二十餘の師團、及び朝鮮、臺灣、關東軍駐支各軍司令部、東京警備司令部、東京灣要塞司令部他全國十六ヶ所の要塞司令部等、我が國軍の第一線に立つて更に多くの中堅、青年將校の活躍せることを推し計るなら、彼等の力の偉大さに再び驚きを禁じ得ない。

殊に今日、北支の風雲急を告ぐるの時、滿蒙國防全線の覇者として立つ關東軍の第一線に立つものが誰であるかを考へれば、當に彼等こそ恐ろしき力の持主であることに氣付くであらう。

以上の如く見來ると中堅、青年將校の力が際限もなく我が國の到る處に伏在することに驚く、そうして、それは述べれば述べる程其の範圍が擴大される。

だが物にはきり、と言ふものが必要だ、だから、此の邊りで筆者は筆を止めよう。



## 六、むすび

世界の情勢は最早如何なる手段を講じようとも、今日東西両面から押し擴がる戦争の危険を防止することは不可能な事態に立至つた。

スペインを中心とする歐洲の政局は一刻々々と爆發の瞬間に近づきこそすれ、それを避く可きことは望み難い、亦北支を中心とする日支の紛争も益々惡化の方向に進みつゝあるのみで、針路を更へようとはしない、

而も、我が國々内の情勢も、それら世界情勢と比例して益々不安を増大させつつある。

此の秋に當り、國家の對外的防衛とそれの爲の國內諸矛盾の排除の直接の責任を持つ軍部——而して軍部の中樞的立場に立ち、軍部今後の進路の決定力である軍部内中堅將校の意志と行動は一重に國民興亡の如何を左右するものである。其の意味に於て今日これら軍部内の中堅、青年將校の意識と行動が、眞に國民の爲に發動するものであつたなら、我々はそれが如何に革新的性質を帯びて來ようとそれを否むものではない。

### 愛讀者諸氏へ！

忙しい現代人には智識吸収のスピード化が必要です。轉變止むことなき世界の情勢、日本の動き——これら問題を常に簡潔に而かも正しく解明しスピーディーに讀者へ送り度いと我社の努力は絶えず傾倒されて來ました。幸ひ既刊各書は各位の讚辭の嵐を頂き、まさに適時安打でありました。何卒既刊書も御併讀の程願ひます。

時局は廻轉する。我社は内容

の清新、眞相の闡明、俊敏なる收拾に向つて一意今後の努力を期して居ります。

御註文は本社振替口座東京八九三八二番を御利用下されば最も完全で便利です。

切手代用も結構でございます。十部以上纏めての御註文は相當割引致します。

「定期會員」制を組織して特別廉價に賣切れの怖れなく入手出来る方法もあります。

規則書御請求下さい。

### 軍部の中堅將校を覗く

定價 金 十 錢 (送料二錢)

昭和十一年十二月二十日印刷納本  
昭和十一年十二月廿三日發行

著者 黒田隆二

發行兼印刷人 古西清光

(製復許不)  
東京市京橋區横町一ノ五  
(城邊ビル)

印刷所 隆文舎印刷所

東京市本郷區元町二ノ九

發行所 有恒社

東京市京橋區横町一ノ五  
(城邊ビル)

電話京橋(56)四〇六六番  
振替東京八九三八二番

◇廣告料金 廣告掲載御希望の向は御照會下さい

◇特約大取次店 東京森田書房・啓徳社・鐵道保養會・大阪新正堂書店・鐵道弘濟會・名古屋川瀬書店



▷ トツレフンパ刊既評好 ◁

阿部次郎著 忽ち廿三版 政財界親分子分 最新刊送料十二銭	城南尊人著 忽ち十八版 軍部出身政治家の擡頭 最新刊送料十二銭	安藤信夫著 忽ち十版發賣中 軍部の主張と無任所大臣 最新刊送料十二銭	角田新三郎著 好評増刷 鐵道疑獄の大物は 内田信也だけか？ 定価十銭 最新刊送料二銭	海津澄夫著 最新刊 軍部と議會政治の動向 定送料二十銭
---------------------------------------	------------------------------------------	---------------------------------------------	-----------------------------------------------------------	--------------------------------------

長谷川

豊著

財政界 凄腕面々

定價十銭 最新刊

「遠くは王子の賣炭齒欠け爺、近くは四谷の古や、り手」と言  
う助六の文句ではないが、之の人物を知らずして政財界  
は語れぬと言ふ音にきこえた凄腕連中を粗上に上し、遠慮  
會釋もなく批判のメスを振つたのが本書だ！非常時政財  
界の明日を知らんとする人は先づ本書を読んで、誰が明日  
の政財界を背負つて立つかを知れ！

▷ トツレフンパ刊既評好 ◁

木村淳一郎著 忽ち二十版 實踐浮世哲學 定送料十二銭	木村明達著 好評五版 頭腦の若返り法 定送料十二銭	和田貞造著 三萬部發行 着眼の人生 定送料十二銭	和田耕之介著 六萬部發行 次期内閣は誰の手中に 定送料十二銭	近藤啓助著 拾萬部發行 露滿國境切迫す 定送料十二銭	近藤啓介著 六萬部發行 爆彈男ヒツトラーの全貌 定送料十二銭	早見賢治著 三萬部發行 大事件後の日本 定送料十二銭	國防經濟 拾萬部發行 軍需工業に躍る人々 定送料十二銭	國防經濟 五萬部發行 日濠を操る魔手 定送料十二銭	堀竹之介著 廿一版發賣中 字垣の動向 定送料十二銭
-------------------------------------	------------------------------------	-----------------------------------	-----------------------------------------	-------------------------------------	-----------------------------------------	-------------------------------------	--------------------------------------	------------------------------------	------------------------------------

社 恒 有

地番五目丁一町橋區橋京市京東  
(ルビ邊城)  
番二八三九八京東替振

社 恒 有

地番五目丁一町橋區橋京市京東  
(ルビ邊城)  
番二八三九八京東替振



城南尊人著

# 軍部出身政治家の擡頭

定價十錢

増刷につぐ

増刷忽五版

政黨は地に墜ち？、官僚また無能故に政治の原動力を失はず、かゝる我が國政治の危機を前に、果して何者が明日の政治の原動力となるだらうか？而してそれは如何なる意圖を持ち如何な形で擡頭しつゝ、あるか、本書はそれらの全貌を餘す處なく解明し新興勢力の中心人物に亘つて迄検討せる刻下必讀の書！

阿部治郎著

定價十錢

好評に付十五版發

賣中

## 財界親分子分

財界政界の芋蔓、金蔓、妻蔓をあまねく手繰出して解剖せる好古の讀物、成功を志す者は、金を貯へる前に亦努力する前に先ず本書を讀んで手つ取り早く蔓を搦め！

有恒社

（ルビ邊城）五ノ一町橋區橋京市京東  
番二八三九八東東替振

337  
670



時事・政治・經濟・社會事情の批判・調査・解剖

眞相報告新讀物雜誌

月刊

# 新 問 題

定價

二十錢

時代を掴む智識の泉!!

大衆的近代人必携!!

★評論あり、話題あり、讀物あり、特ダネあり、何んな人間にも讀める雜誌。

★政治・經濟・社會・時事問題等あらゆる問題を平易に解剖批判・調査せる、時局を理解し明日への目標を探す上に一番役立つ雜誌、

★常に國民的立場に立ち、眞相を傳へ、讀む人の氣持で編輯した雜誌

東京市橋區一町五ノ(ルビ邊城)

新 問 題 社

發行所

東京市橋區一町五ノ(ルビ邊城) 電話東京 番二八三九八 東京 番二六六〇四 番二六六〇四